

とりかへばや物語と外国文学

鈴 木 弘 道

曾て、島津久基博士は、その論文「源氏物語と現代作家」(「源氏物語新考」所収)に於て、

唯、始終古い物ばかりあさつてゐて、私自身それこそ現代文学には縁遠い方なのであるけれども、暇々で目に触れる新しい——そして極めて新しき——創造であるべき作品を読んで行くうちに、不図その中から紛れもない一千年前の世界最初の大小説の片貌がにこやかに——時には冷笑を含んですら——笑ひかけて来ては、覺えず此方まで微笑に釣込まずに措かない瞬間が、意外にも余りに屢々待ち設けられてあるといふ私の経験を、報告してみたいと思ふだけである。

と最初に断つて、現代文学作品の中に見られる、源氏物語の趣向や文章と相酷似した諸点を指摘された興味ある研究を發表されたことがある他、アンドレ・ジイドの「狭き門」と源氏物語宇治十帖とを

比較して、類似点・重要点につき対照されたこともある(「紫式部の芸術を憶ふ——源氏物語論攷——」所収「アンドレ・ジイドの『狭き門』と源氏物語宇治卷(覺え書)」)。又、これとは別に、吉田精一氏は、所謂「比較文学研究」に於て從來あまり顧みられなかつた「非直接的な關係に於ける比較研究」をも、この研究の領域に入れようといふ見解を示され、

たとへば豊玉姫伝説が広く太平洋の各地に分布してゐるとすれば、それはそのやうな神話の行はれてゐる社会が大体似かよつた文化圏にあること。その神話が一方に於て複雑化されてあたり些少の相違を生じたりするとすれば、それはその社会相の相違にもとづくこと等である。又たとへば平安朝の物語類と、十七世紀ルイ王朝に栄えたクラシックの文芸とは全然没交渉であるけれども、しかし、宮廷貴族文学としての性格には共通するものがあるのであるから、ルイ王朝の環境と、そこから生じた文芸との發生的研究、及びフランス宮廷文芸の性格等を、平安

朝のそれと対照せしめることによつて、我が国の特色を闡明することはできるであらう。

と述べられた。「国語と国文学」昭和二十三年十月号所載「比較文学について」。

勿論、かうした研究法については種々異論もあらうかと思ふが、私は島津博士の御研究には少からず心惹かれる一方、又、吉田氏の御提案に対しても多大の賛意を抱いてゐるので、以下、試みに、とりかへばや物語に類似する作品を外国文学から若干拾ひ出して比較対照することにした。もつとも、この種の比較研究に於ては、吉田氏も説かれるやうに「個人を問題の外に置き、ある種の社会、或は環境を研究対照に選ぶ」必要があり、又、矢野峰人博士の述べられたごとく「一方に於てはその底に働いて居る原理的なものを発見すると共に、他方相似と相違とを産むに至つた諸種の事情を明にする事を目的とし」なければならぬのである。「国文学解釈と鑑賞」昭和二十八年八月号所載「比較研究の意義」。尚、矢野博士は、この方法が高安月郊の「東西文学比較評論」のやうに古い型のものだと説明されてゐる。が、現在の私には、まだ社会的事情を究明するだけの十分な準備も整はないので、今は大体、それに至る一種の過程的な報告として記すに止めた。吉田氏提案を歪曲した、矢野博士の所謂旧態依然たる、知識的遊戯・好事家的考察との謗りを受けられるかも知れないが……。

二

ここでは、世界的劇作家シェイクスピアが一六〇〇年頃に書いたと言はれる作品「十二夜」(又の名「お好きなもの」^{What's in a Name?}「Twelfth Night」)と、とりかへばや物語とを比較しよう。

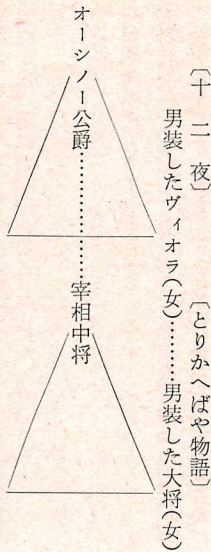
「十二夜」は、シェイクスピアの喜劇的技倆の愈々円熟した時期に成つたものであるだけに、頗る純粹なる喜劇的気分の横溢した傑作として好評を博してゐるもので、初期の作「間違ひの喜劇」と同じく双生児の男女の取違へられることがその主要な筋をなしてゐる。而して、坪内逍遙博士に拠れば、この作品以前には、イタリヤの喜劇「インガンナチ」(「だまされ」^{Ingannati}——一五三七年刊行)や「インガンニ」(「取りちがへ」^{Inganni}——一五九二年刊行)などと筋も外題も相類似したものがあつて、シェイクスピアは主としてこれらに依拠したものと考へられるやうである(早稲田大学出版部版、坪内博士訳「十二夜」緒言)。

さて、この「十二夜」の主題は、とりかへばや物語に於ける変成男女の取り替へと極めてよく似通つてはゐるが、後者が、全くの性的倒錯より生ずる非現実感と暗澹たる頹廢的情緒を醸し出しつつ、官能的表現を以て宿命に迫はれる人間の姿を描き出してゐるのと比較すれば、前者には愉快に嬉笑せざるを得ない喜劇的価値があり、更に内容の詩的価値も十分に感得し得られるものがある。又、両作品の一部を調べて見ると、次のやうな類似点を指摘することが出来る。

先づ、「十二夜」に於て、ヴィオラが、難船に遭つて行方不明になつた兄のセバスチャンを死んだものと思ひ、イタリヤ国の公爵オーシノーに、男装して奉仕することになるが、とりかへばや物語で

も、大将（女）の行方不明に際し、骨肉愛の断ち難き思ひは、兄の尚侍（男）をして女装を解かしめ、大将（女）を捜しに出掛けるところがあつて、その経過は全く異なつてゐるが、兄妹を主題とし、又、変装に関する趣向を使用した点は両者同一である。

次に「十二夜」で、男装したヴィオラ（女）がオーシノー公爵に仕へる中、二人の間に恋愛関係が成立すると同時に、オーシノー公爵には他の恋人オリヴィア姫のあつたことは、とりかへばや物語で、男装した大将（女、当時中納言）が宰相中将に想ひを懸けられ、而も、宰相中将は四の君とも恋愛関係を結んでゐるといふのと同じ趣向である。又、「十二夜」でオリヴィア姫が男装したヴィオラ（女）を真の男性だと思つて恋ひ慕ふ関係は、とりかへばや物語で、男装した大将（女）と四の君の関係が夫婦関係であるのと類似してゐるから、結局、両作品中の主要人物三名の関係を图示すると、次のやうな三角関係にあると言ふことが出来るわけである。



更に、変装の賣した悲喜劇は、とりかへばや物語には種々の事件となつて現れて来るが、「十二夜」に見られるものは言ふまでもな

く喜劇で、それに酷似した趣向がとりかへばや物語に於ても指摘される。即ち、「十二夜」では、男装のヴィオラ（女）と兄のセバスチャンが屢々見違へられる事件が描かれ、男装のヴィオラ（女）を深く思慕するオリヴィア姫が、彼女の叔父トビー・ベルチと闘ひ始めたセバスチャンをヴィオラ（女）であると信じて、セバスチャンにトビーの無礼な行為を寛恕あれと乞ひ願ふところがあるのは、丁度とりかへばや物語に於て、男装してゐた大将（女）が、女装してゐた尚侍（男）と入れ替つて夫と新しく今尚侍（女）・今大将（男）となつてゐるのを知らない四の君が、今大将（男）をもとの自分の夫の大将（女）と思ひ違へる趣向と同一である。もつとも、この場合セバスチャンは仔細がわからず呆然としてゐるが、今大将（男）の方はわざわざ自分がもとの大将（女）であるかのごとく装つてゐるから、とりかへばや物語の方が尚一層複雑な趣向を採つてゐるとも言へるであらう。この他、帝を始め宰相中将や麗景殿の女御の妹、吉野の姫君等も亦、今大将（男）及び今尚侍（女）を夫々もとの大将（女）や尚侍（男）と思ひ込み、「十二夜」のオーシノー公爵その他の関係人物も一様にセバスチャンとヴィオラ（女）を混同してしまつてゐるから、読者をして混乱せしめるものがある点、両作品とも共通してゐるのである。

「十二夜」はとりかへばや物語とは何等歴史的交渉のもとに成立したものではあるまいが、変装を取扱つて而も登場人物間の関係や一部の趣向が互に酷似するといふ作品の他國に見られるのは、まご

とに珍らしいことである。けれども、世界の文学史上に炳乎として輝く劇作家シェイクスピアよりも、もつと早い時代に於て、東洋の孤島、日本に、無名の作者によつて書かれた「とりかへばや物語」の現存することは、更に興味のあることではないだらうか。

三

次に、一六四四年にパリで生れたアベ・ドゥ・ショワジの「女装粹人行状記」と比較して見よう。この書は著者の自叙伝で、原題名の「Memoires de l'abbé de Choisy, habillé en femme」

（「女装したショワジ師の回想録」を、鈴木力衛氏が「叢書・めえとるだむら」〔Les Maitres de l'Amour〕の一冊として訳出刊行されたもの（穂高書房刊）であり、十八世紀以来フランス史上に於ける隠れた傑作として汎く愛読されてゐるが、その一部分は既に一七三五年、「ランベール侯爵夫人に宛てたデ・パール伯爵夫人の回想記」として出版されてゐる。而してこの作品中、とりかへばや物語の変態的な男女の性的倒錯を想はしめるものは、言ふまでもなく著者ショワジの女装と、シャルロット嬢及び女優ロズリーの男装である。

さて、ショワジの女装は、彼自らが、

子供のころからわたくしは娘の身なりをするのが好きだつた

（一〇〇頁）

と告白してゐる他、

子供のころの習慣といふものは奇体なもので、一生抜け切らぬ

ものでございます。わたくしの母は生れるとすぐ、わたくしに女の着物を着せました。年頃になつてもずっと女のものを着て居りました。或る大きな劇場で、五箇月ものあひだ、わたくしは引きつゞき娘の役を勤めました。誰も気がつくものはありません。わたくしに言ひ寄る男も数人できて、ずるぶん控へ目ではありましたが、ちよつと気を持たせてやつたこともございませぬ。（中略）そんなわけでわたくしはこの世の中で味へる最大の娛しみを味つて居りました。

（一七・一八頁）

と言つてゐるごとく、母の意志にもよつたものであつた。しかるに、とりかへばや物語に於ける若君（後に尚侍、男）の女装は、同じく父左大臣の発案によつたものとは言へ、先天的に彼は女性的な性質や動作で行動をなし、而も、わが身が他の一般男性と異なることを知るや、次第に悲歎の涙に暮れる、といふ点には稍々相違が認められる。即ち、ショワジは、服装は勿論、デ・パール侯爵夫人とか、ガンジ夫人、サンシー夫人等の仮名をも用ひて完全に女性として行動してゐるが、とりかへばや物語の若君は、尚侍として宣耀殿にゐるやうになつてからも、常に自己の身については懷疑的な態度で沈み勝ちであつたのである。尚、ショワジの語るところに拠ると、当時の新聞「メルキュール・ガラン」には、「さるやんごとない殿御があつて、容貌が美しいところから女にならうと思ひ立ち、みんなは口を揃へて奥様と呼ぶやうになり、美しい金の衣裳にスカートを穿き、耳飾り、付け黒子をつけ、言ひ寄る人までである」（二五頁）といふ話があつたらしいが、とりかへばや物語の若君を想起せしめ

るものがある。

次に、シヨワジの愛人であつたシャルロット嬢の男装は、彼女自らの創意ではなく、女装に甘んじてゐるシヨワジにとつては、彼女を愛するあまりどうしても単に二人の關係を女性対女性として済ませることが出来なかつたところに由来するもので、彼女をして男装させたシヨワジは、「かうして、わたくしはしよつちゆうシャルロットに少年のみなりをさせ、ひとり悦に入つてみました。わたくしは女になりすましてゐたので、まるで本当に結婚してゐるやうな形になつたわけです。」(四二頁)と述懐し、「可愛い、シャルロット。お前がいつも男の子のなりをしてくれてたら、わたし、もつともつとお前が好きになるわ。」(四四頁)と愛撫してゐるのである。かくして、シャルロット嬢はモールニー殿、シヨワジはサンシー夫人として二人は結婚式を挙げるのである。又、シヨワジは、後にシャルロット嬢と別れてから、新たな恋人女優ロズリーをも男装させ、而も、「わたくしはますます好きになるばかりで、彼女をわたしの可愛い夫と呼びました。」(一七四・一七五頁)と語つてゐるほどであるが、このやうな奇想天外の成行きは、シヨワジの性的倒錯者たることを物語るもので、彼の変態的な強烈な美への憧憬は、彼の語る次の言葉に最も適切に現れてゐる。即ち、彼はこの奇妙な楽しみの根源を反省して、

神の本性は愛され、讚美されることになるのです。人間もその弱点の許す限り、同じ悲願を抱くものと申せませう。さて、愛を生ぜしむるものが美であつてみれば、また美といふものが概

して女性の屬性であつてみれば、男が他人から愛されるやうな美しい目鼻立ちがあり、或ひはあると信ずるとき、女のなりをした方が遙かに効果があるので、女装をして美しさを増さうと努めるのです。さうすると、愛されるといふえも言はれぬ楽しみを味はふことができます。

(二二・二三頁)

と所感を述べてゐるのである。一方、とりかへばや物語の作者は、同じく男女の性的倒錯を企図したものであり、兩人の間に於ける情事は流石に血を分けた兄妹を取扱つただけに、シヨワジのごとくこれを試みることはしなかつたが、姫君を男装させ若君を女装させた作者の心的状況を推察するに、矢張りシヨワジのごとき耽美主義的な衝動に駆り立てられてゐたのではないだらうか。即ち、女装した若君と男装した姫君の様子はいづれも「美」そのもので、若君を見た父左大臣でさへ、「いにしへのかぐや姫も、実にかくめでたきかたは、かくしもやあらざりけむ」(校註日本文学大系本四七〇頁。以下、とりかへばや物語の引用文・頁数は同書のそれである。)と感ずるほどであり、又、姫君も「御髪も、これは長きこそおとりたれ、裾などは、扇をひろげたらむやうにて、長に少しはづれたるほどに、こぼれかゝれる容態、頭つきなど、見るごとに、笑まれ」(四七三頁)るのであつた。かかる性的倒錯より生ずる「美」に対しては、流石に好色なる宰相中将の見逃すはずはなく、中納言(男装した姫君)の「見るめかたちの似る物なく、愛敬こぼれて、美しきさまの、かゝる女のあらましかばと、見る度にいみじく思」(四七七頁)ふのは、取りも直さず宰相中将が女性の男装した場合の変

態的な魅力を感じてゐる証拠であり、又宰相中将が尚侍（女装した若君）に懸想して物忌の時に忍び込むなども、全くシヨワジーに言ひ寄る男の多数あつた関係と同様である。

又、女装したシヨワジーの、シャルロットに対する愛情は、實質的には男女間の恋愛関係であらうが、形式的には飽くまでも女性同志の同性愛に他ならない。而して、この関係は変装した男女間にはあり得べきことで、とりかへばや物語の尚侍（女装した若君）と女一の宮の關係に於ても矢張り見られるものである。

この他、変態性欲者であるシヨワジーは、とりかへばや物語の宰相中将の好色ぶりに対比させることが出来る。殊に、「女装粹人行状記」の「デ・パール伯爵夫人の名の下に行はれた情事」の段の結末近くは、とりかへばや物語に吻合するものが多い。先づ、シヨワジーは、先にも述べたごとく、女優ロズリーに懸想して、狩に出掛ける時には彼女にも男装させることにしたのであるが、遂に二人の關係はロズリーをして妊娠状態に陥らしめる結果となり、彼女は「気分が悪くなり、食慾を失つて、毎朝きまつて嘔吐を催すやうにな」（一七五頁）つたので、シヨワジーは「事の成行きを察して、元通り娘のみなりをさせ」（一七五頁）尚、「五箇月か六箇月たつて、このまゝ、田舎にあたらすべてが露見し、悪い噂が立つたらうと見當をつけ」（一七六頁）愈々バリーへ出発することになるのである。

とりかへばや物語では、大将（女）の男装は宰相中将の手によつてなされたものではないが、既に彼女の中納言であつた当時から魅力を感じてゐた彼は、その女性であることを知るや遂に契を結び、そ

の結果彼女は悪阻の症状を呈するやうになつて、「物も更にまゐらず、いたく面瘦せて、つゆ橋柑子やうの物も見れず、つきかへしなどし給ふ」（五四七頁）やうになるのである。而して、宰相中将は以前から彼女にもとの女の姿に返ることを勧めてゐたのであるが、かういふ懐妊の事件が持上ると流石に二人とも、世間体を考へても間が悪く、彼はしきりに、「かゝることさへ出できぬとならば、猶はじめも聞えしやうに、産靈神の契りを、違へぬさまに思しなりね。かくてのみは、誰が為もいと堪へ難くなむ。」（五四八頁）と口説き、而も彼女の容易に靡かぬのを見ては、「いかに今までかくてのみは、人目も怪しく、見咎むる人もあらむ時は、いかにいみじからむ。」

（五五九頁）と言ひ聞かせたので、遂に二人は宇治へ行くことになり、そこに到着した翌朝になつて、初めて彼女は宰相中将の勧めに従ひもとの女の姿に復するのである。従つて、ロズリーがもとの女の姿に返る時期、及びシヨワジーのなすがままに素直に行動するところなどは、とりかへばや物語と些か相違があるが、その大筋は兩者互に似通つてゐることがわかる。更に美の探究者であり自己の服装や化粧に気を配つてゐたシヨワジーは、ロズリーの懐妊に苦しむ様を見てはやさしく慰めたり世話をすることを忘れず、「わたくしは毎日ロズリーに逢ひに行き、喜ばせてやらうと、いろいろ可愛らしい贈物をするのでした。もう彼女のことばかり思ひつづけ、自分のことや化粧しようなどといふことはちつとも考へなくなりました。わたくしはさつぱりした着物を着、いつも帽子をかぶつてをりましたが、耳飾りや附け墨子は決してつけませんでした。」（一七六

頁・一七七頁)と彼自身語つてゐるが、とりかへばや物語の宰相中将(当時、中納言)も、大将(女)の懐妊に際しては色々と心配もし、特に出産直前などは、「実に物心ぼそく苦しきまゝに、いとたゆげになよなよと、心苦しげなるを、見給ふ中納言の御心地、我が身に代へても、この人を、いかで無事にとおぼし惑ふ」(五九〇頁)のであつた。即ち、愛する者のためならばこそ、すべての欲望を断ち切ることが出来るどころの勇気をば、ショワジも宰相中将も共に持つてゐたといふ露骨な表現も、その共通点ではないだらうか。かくして、ロズリーはバリーにて「可愛らしい女の子」(一七七頁)を生み落したが、その子は後に或る貴族と結婚して幸福に暮すまではずつとショワジの手によつて養育され、一方ロズリーはショワジと別れてデユ・ロザンと正式の結婚式を挙げることになる。とりかへばや物語に於ても、大将(女)は宇治で「光るやうなる男君」(五九〇頁)を出産してから宰相中将のもとを去つて京都に帰り、後、后として繁栄する反面、取り残された宇治の若君は宰相中将の手によつて養はれ、遂には三位中将の位にまで昇るほど栄達するのである。今、この筋立を、島津博士の試みられたごとく項目式に並びて対比すると、次のやうになる。

女装粹人行状記	
(イ)	ショワジの手によつて、ロズリーは男装させられる。
(イ)	とりかへばや物語 姫君は、性格・動作等が男性的であるため男装させられる。

(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ヘ)	(ホ)	(コ)
ロズリーはショワジと別れて、デユ・ロザンと正式の結婚をする。	生れた女の子はショワジの手で養育され、後、或る貴族と結婚して幸福に暮す。	ロズリーはバリーで女の子を生み落す。	ショワジは懐妊状態のロズリーを色々と慰めてやる。	事件を紛らせるため、二人はバリーへ行くことに決める。	ショワジは懐妊状態のロズリーを色々と慰めてやる。	ショワジとロズリーとの関係が深まり、遂にロズリーは懐妊する。
(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ヘ)	(ホ)	(コ)
姫君は宰相中将のもとを去つて、後、后として繁栄する。	宇治の若君は宰相中将のもとで養はれ、やがて三位中将の位に昇進するほど栄達する。	姫君は宇治で若君を出産する。	宰相中将は懐妊状態の姫君を何かと世話してやる。	事件を紛らせるため、二人は宇治へ行くことに決め、ここで初めて宰相中将は姫君をもとの女の姿に復す。	宰相中将は懐妊状態の姫君を何かと世話してやる。	宰相中将と姫君(当時、中納言)との関係が深まり、遂に姫君は懐妊する。

* * *

以上のごとく、「女裝粹人行状記」はとりかへばや物語と部分的に極めてよく類似する箇所があり、いづれも官能的描写の手法が全篇に使用されてゐるなどは、両作品互に國を異にし時代を異にしてゐるだけに、流石に奇異の感を抱かしめるものがあるが、とりかへばや物語が平安末期に於ける貴族階級の没落から武士階級抬頭の中世に移行する鎌倉時代初期の、混乱した社会情勢の一反映として成立し、又「女裝粹人行状記」が、十七世紀に入つて以来中央集權が確立し、次第に王權の伸張して行くフランスに於て、未だ中世の封建的匂ひが強く漂つてゐた暗黒の社会的背景のもとに成立したことを考へて見ると、官能的美の溢れた両作品が互に酷似するのも決して偶然ではないと考へてもよからう。しかしながら、時代の影響とは言へ、既に約四百年以前に、東洋のわが國に於てかかる趣向の文学作品が現れたことによつて、わが國の文学の發達がいかに早かつたかを今更のごとく痛感せざるを得ないのである。

四

最後に、「中央公論」昭和二十五年一月号（文芸特集号）には、ムウスニエ・ド・クエルロン（十八世紀）に拠つた勝見勝氏の「取りかへばや物語（冬の夜ばなし）」といふのが掲載されてゐるので、その梗概を示して参考に供する。

——レオニルとカリビガといふ二人の美しい娘があり、夫々結婚するが二人は相愛らず仲がよい。しかし、どちらも夫婦仲はよくなかつた。プロンテはレオニルの夫であるが、或る日、彼はレオニル

とカリビガが共に水浴してゐるのを垣間見し、彼のレオニルに対する心はカリビガに移つてしまふ。その後、プロンテは夢の中でカリビガを抱き締めてゐる心算でレオニルを抱き、レオニルも亦カリビガになつた心算でその愛撫を受けたりした。しかし、いつまでもこのやうな状態を続けることの出来ないレオニルは、一策を案じて、或る夜、自分の替りとしてプロンテと寝てもらふことをカリビガに依頼し、早速実行する。プロンテは、いつもと同様に傍には妻のレオニルが寝てゐるとばかり思ひ込んで、レオニルになりすましたカリビガの誘ひの水を払ひ除ける。翌朝、実のレオニルが来て昨夜の真相を知つたプロンテは残念に思ひ、その後はレオニルを愛するやうになつた。

要するにこの話は單なる妻の「取り替へ」であつて、とりかへばや物語のとき男女の性的倒錯とは全く無関係である。しかし、内容から当然「取りかへばや物語」とすべき題名をわざわざ「取りかへばや物語」としたところに、わが國の古典とりかへばや物語に対する訳者の意識が窺はれて興味深く感じられる。

尚、附言して置くが、高木卓氏の御教示に拠ると、とりかへばや物語に類似する外国文学作品として、ドイツ文学では、C・F・マイヤアの「グスタフ・アドルフの小姓」といふ比較的有名な作品がある他、ユリウス・フォン・フォスといふ無名作家の「Don Vingo und Donna Cajetania」と題する物語が、男裝・女裝を取扱つてゐるらしいことである。

〔本稿は昭和三十三年度文部省科学研究費による研究の一部である〕